

番条のお大師さん

—番条八十八カ所詣り—



阿弥陀院内

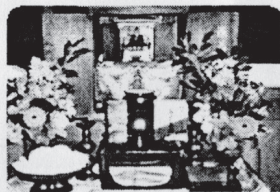


門前に厨子に納まった弘法大師(空海)の木造が出開帳される。

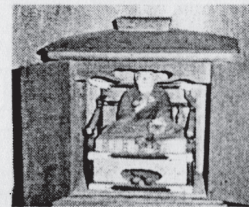
村の各戸に北から1番・2番へと南へと続き88番まで(基本的には)



厨子の内扉には四国88ヶ所の札所番号・寺院名・ご詠歌が朱書されている。



お供はたけのこ・ふき・小豆飯・乾物など

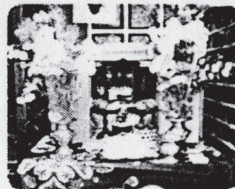


★お大師さんとして親しまれている番条八十八カ所詣りは、いつ頃からはじまったのだろうか。

- ・ 村人の間には、江戸時代の終わり頃、ちょうど88軒の家があったので始まったという話が、広く伝えられている。
- ・ 1933(昭和8)年に大師堂(現在の建物は1916(大正5)年に再建)の時の住職が書いた「由来書」によると、1830(文政13)年に、番条村でコレラが流行し、村人が申し合わせて弘法大師を信仰することになった。そして四国八十八カ所を巡拝している時、ある寺で本尊像をもらって帰り、庵を作って奉納し日夜信仰しはじめたのがはじまりとのことである。

◎ 1815年の大洪水、1822年からのコレラの大流行等が、人々を不安に陥し入れたに違いない。また、1830年には、大和一元でお蔭参りがはやり、村々を巻き込んで世情は騒然としていた。このように幕末になって村の従来の秩序が揺らぎ始めていた頃、各家の平等な参加による八十八カ所詣りが始まったのではなかろうか。

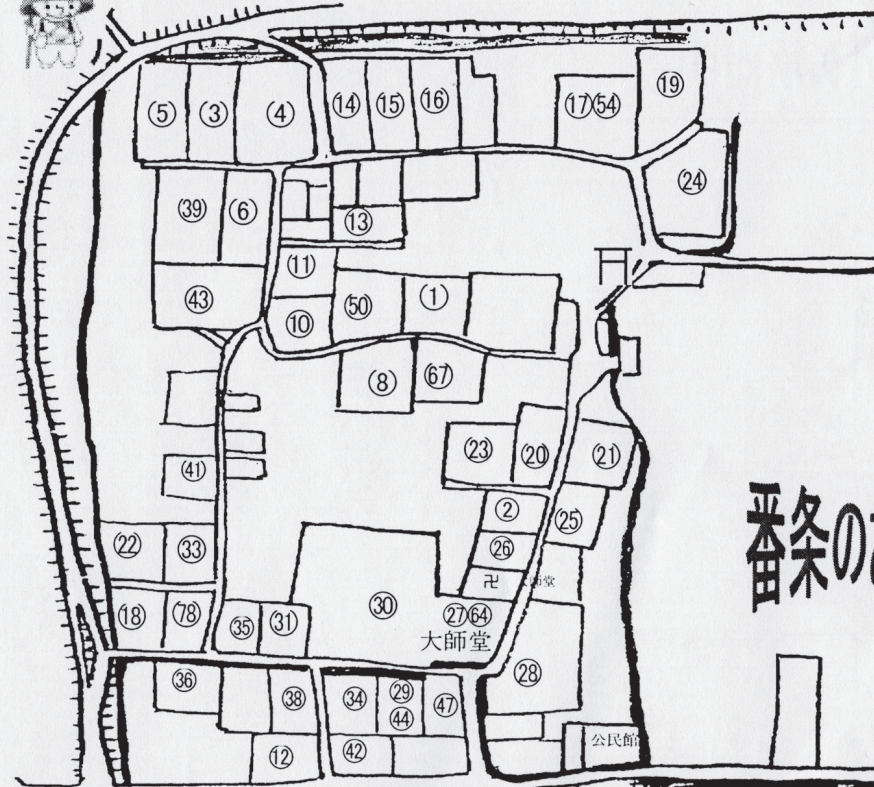
○ 出開帳は、1年の初め1月21日の初大師、4月21日の春の大師、そして8月21日の盆大師と3回行われていたが、明治の末頃から春の大師だけになったそうである。



★ 昔、ある家が荷車で引っ越しをしようと村を出る橋のたもとまで来たが、いくら牛の尻をたたいても動かなくなった。荷車に積んでいたお大師さんの厨子を降ろすと、途端に牛が歩き始めたという話が、村人の間に伝えられている。それ以来、村を離れる時には必ずお大師さんを隣近所や親戚に、またお寺に預けるようになったという。今に至るまで、八八のお大師さんが1つも欠けずに残っているのである。

★ 番条という集落は、中世には番条荘とよばれ、大乘院方の興福寺衆徒であった番条氏の本拠地であった。番条氏はこのあたりでは最も有力な武士であり、室町時代の資料には、番条長懐、番条戌亥、番条辰巳などの名前が見える。「大乘院寺社雑事記」によると、番条長懐父子は一条院方の筒井順永と対立していて、1459年の8月に、筒井一党に攻められて館が焼き払われ敗れ去った。その戦いの際、番条荘の郷民も堀に落ちて、死ぬ者が多数にのぼったということである。このことから、15世紀半ば番条荘は環濠集落であったと思われる。





番条のお大師さん

佐保川



阿弥陀院
79 40 37 45



大柳橋

藪大師

